

Interview

サイバー・スペースのなかのわたし

パソコン通信で生涯学習が 広がる、深まる、楽しめる

昭和音楽大学短期大学部助教授 西村 美東士 (mito) さんに聞く

●(三沢 以下同じ) パソコン通信を利用した生涯学習は、フェリス・ツワ・フェリスの生涯学習とはまた違った可能性が見えていて興味を沸かせています。ただ、今の所ではコンピュータという、学習情報を検索するくらいですね。

〔西村 以下同じ〕学習情報提供では、今後は双方向のコミュニケーションとしてパソコン通信が必要ですよ。学校の先生がいるいろいろな情報をみられるAVIPUB(日本視聴覚教育協会)というネットがあります。そこで一番人気があるのは指導案情報とかではなくて、勝手なおしや、雑誌をするAVサロというコーナーなんだそうです。生涯学習でも同様でしょう。学習者同士の勝手な役にたいたいとおもわれるような情報の楽しい交流は、現代社会で求

めているんだと思います。

「僕らの所で早朝野球やつてるけど、誰か相手してくれるチームがない?」というような、人間の匂いがしてくるような情報にあふれるシステムほど、何回もアクセスしてみたくなくなるんじゃないですか」

●そうですね。人間くさいパソコン利用がいい。でも、必要だからって職員が全部パソコンがでなければという大変ですね。

「これだけパソコンオタクがいる時代に、職員全員がパソコンを習熟して苦手な市民を助けるという発想は古い。それよりは、高校生あたりをつかまえて「得意なんだって? プログラムつくってくれよ」と頼んだりする人間関係能力の方が援助職員にはよっぽど必要です。あるいは、技術者にこうい

うところが使いづらいとユーザーから注文をつける能力が求められるでしよう。

パソコンをやっているオタクの連中は「将来の社会は俺みたいな人間を必要としている」と、自己肯定する人間が多いという調査結果があります。こんな自己嫌惡の世の中ではないことですよ。僕達がおだてて木に登らせ、役にたつ体験をさせてあげればいい。これこそ学習支援サービスです。」

●生涯学習で「いつでも、どこでも、誰でも」と言われていても、まだまだ抜け落ちてるところがたいていあります。パソコン通信でいいのは、家から出にくい人達、高齢者、障害者、子育て中の母親などの学習環境の整備ができることだと思えました。

●その時も双方向の通信ができたら、学習ボランティアが活躍できる例はありますか。

「乳幼児家庭教育学級の葉書通信なんかあるけど、それをもっと柔軟にしたのがパソコン通信でできる。手作りのものを送るとか、気軽にライブ感覚できるんじゃないかな。」



●写真右から西村美東士 (mito) さん インタビュアー/三沢尚子さん

る可能性が高いですね。

「そうですね。それから素人がビデオカメラをもっていう時代です。ビデオ映像をパソコン映像にして編集して、視聴者参加型の教材を作ろうという夢も広がります。」

●学習方法ももっと広がって楽しいのができるんですね。

「今パソコンで『プレゼンテーションビデオ』を作って、授業に使っています。気分転換や、僕の早口を避けてじっくり考えてもらいたい時に映しています。プレゼンテーションソフトで機械の方が数秒で簡単に作り上げてくれますよ。また、講師が作って遠方の講座に送ると、手作りの遠隔教育もできますよね。」

●先ほど言った学習ボランティアと学習者との関係ですけど、俳句の宗匠がパソコン通信の中で批判されて大変だったという話を聞きました。現実の社会では宗匠が批判されることなどほとんどないけれど、パソコン通信では横関係が基本なのだから学習ボランティアと学習者の間でもそんなことがおこってくるのでしょうか。

「ええ、そうだと思います。パソコン通信や知的水平空間においては、そういう水平批判なら歓迎なんです。本当にひどい例として

人権無視の発言をする奴らが必ず出てくる。だけど、僕が言いたいのは、じゃあパソコン通信をやめることによって解決できるかという、それは全然解決できていないじゃないかということです。学習者同士のやりとりの中で、最後にはそういう人権を踏みにじる自信のない奴らを他のネットワークカーたちが馬鹿にして笑えるようにならばいいんです。そういう問題が起こるからかやめようというのだったら、そこが行政の敗北主義ですよ。」

知的水平空間だったら、批判は喜ばないとおかしい。ただし人権を無視された場合は怒る。それでいいのです。人間のストロークは、肯定的ストロークと否定的ストロークの二種類に分類されています。けれど、授業をやっている感じは、知的水平空間においては、信頼しているからこそ批判する、意見を言うというような「もうひとつのストローク」もあると思うんです。僕はこれを批評的ストロークと呼んでいます。

パソコン通信でもそれができるようにすると思います。パソコン通信でけんかしてもよいから、一番居心地よいのは何かを体験しながら探していけばいい。」

●確かにパソコンだと知的な深い論争はしやすいと思いました。パソコン通信は書き言葉によるコミュニケーションですね。書き言葉のコミュニケーションの特徴はなんですか。

「パソコン通信の場合は書き言葉といつても、けっこう話し言葉な言葉の中間的存在だととらえています。書き言葉のはずなのに普通書き言葉で書かないことを書いていう。丁度、交換日記のノリに近い。これが新しいマージナル（境界的）な文化を作るだろうと思っています。」

●情報を受け取るだけの時代から、素人がパソコンでどんどん発信するようになったんですものね。

「加えて言えば知的水平空間では、肩書きや地位が上か下かではな

く、一人一人のその人らしさの世界なんです。プロフィールがナルにはつらいかもしれませんよ。」

●厳しい面はあるけれど、自由で創造的な空間が開かれているんですね。ただ、パソコン通信をしようにとした時、通信機器がどんなに簡単になったとしても、みんな書き言葉のコミュニケーションに入っていないのでしょうか。

「これについてアスキーの副社長が『パソコン通信はエリートのもので、私たちは大きく期待しない。大衆には無理だから、動画で楽しませるほうが期待できる』といったように記憶しています。僕はこれに反対です。大衆が活字発信をする時代です。一部の知的な人間しか活字文化を楽しめないというのは、違うと思いますよ。」

●例えば、高齢の男性など話し言葉の文章に抵抗はありませんか。



●写真 mitoさん

「地位、肩書き、身分をばかばかしいことだと思えた瞬間には、パソコン通信のオタク用語でどの年代でも書けるようになるものです。『えー、この人がこんなふうに書けるの』と思えるような微笑ましい書き方ができるようになる。これはパソコン通信が人間を地位、肩書き、身分から解放してくれるということの証拠だと思っています」

●そんな素敵な面も持っているんですね。これからどんなパソコン通信を利用した取り組みがなされるか、楽しみです。

※ストロークはあなたの存在に気づいていますよと示す行為

取材を終えて

「メタスキル」という新しい言葉が登場した。要するに、たかがパソコン、されどパソコン。自分

[ACCESS] 西村 美京子
昭和音楽大学短期大学
〒243 神奈川県厚木市関口808
Tel: 0462-45-1055
Fax: 0462-45-4400
E-Mail: ID.Q00F0704

自身の回り知れない潜在能力を引き出す道具がパソコンなら、破壊への道もあるのがパソコンである。日本的に言うならば「パソコン道」を究めるようなパソコンの対し方が「メタスキル」なのだろう。

問題は、道具を扱うという意味において、それを扱う人間の意識の側にあるということだ。それは日々パッケージが変化する未知なるサイバー・スペースのなかで、自分自身を失わないためには、その責任の重さ・自らの存在を理解するにたる意識の自覚または熟練が求められる。しかし、この冒険こそが、意識の進化という可能性を上げ、未知のなかで生き抜くための知性・ユーモア・エネルギーを手にいれることができるのではないだろうか。

そして、パソコンはそのためのものであり、それ以上のものではないということだろう。

このことの本当の意味は、サイバー・スペースのなかにあるのではなく、むしろその外での行動と実践にあるだろう。サイバー・スペースの外の世界に対して、自分自身の可能性を開くようにするために、サイバー・スペースを有効に活用することが、生涯学習にとつての意義があるのではないだろう。

うか。

今、人々はサイバー・スペースの可能性のなかで、自身の存り方を模索しているのだろう。自らが自分自身の限界、または可能性を発見することにおいて、また、使い方次第でこの環境はこれまでにはなかった生涯学習の場として十分機能するものだと思う。生涯学習の場では本紙で紹介した以外にも、さまざまなパソコンを利用した事業が展開されており、その進展や可能性には驚くばかりであった。例えば、確か警備保障の会社だったセコムが、パソコン通信を利用して塾を始めた。朝日カルチャーセンターは、インターネットで「受講したい」講座は何か、良い講師はいないか」と情報収集をしている。登校拒否の子ども達のためのフリースクールが、パソコン通信で学習指導を始めた。

学校教育では、今「いじめ」「自殺」という、学校の存在意義そのものが問われるような事件が生じ、なにがなんでも学校へ行くことが善だった時代を終え、学校をとらえなおす動きが高まっている。時と場合によっては、遠隔教育を交える可能性を考えてもいいかも知れない。

社会教育でもスローガンである

「いつでも」「どこでも」「誰でも」を実現しようとする、フェースツーフェースの学習だけを考えていては、不可能である。アメリカのシニアネットは、高齢者の生涯学習を考える時に大きな示唆を与えてくれた。

パソコンが大衆化してきて、生涯学習体系のなかで遠隔教育がクローズアップされてきた。みんな集まって学習する機会に加えて、パソコンでネットワークしながら学習するような形態が増えてくるであろう。

また、パソコンは情報提供、宣伝、調査、学習方法の開発など、広く利用されていることもわかった。今回の取材を通じて全く新しい、豊かな学習環境の構築をめざすための道具としてのパソコンがあることを再認識した。

(文/三沢 昌子)



●写真 三沢 昌子さん